第十二回新ラテンアメリカ(ハバナ)映画祭グランプリ受賞

パパ ヘミングウェイ
私は生きる、私は生きる。

HELLO HEMINGWAY

ハロー　ヘミングウェイ

ラウラ・デ・ラ・ウス　ラウル・パス　エルミニア・サンチェス　ホセ・アントニオ・ロドリゲス
監督：フェルナンド・ペレス　脚本：マイダ・ロイェロ　キューバ／ICAIC＝パイオニア映画シネマデスク

世界の名画を見る会vol.14

(企画・構成 高野悦子)

高野悦子

第1部 対　談 (14:00〜14:45)
「ラテンアメリカ映画をめぐって」
高野悦子(岩波ホール総支配人)
大竹洋子(東京国際映画祭 女性映画週間ディレクター)

第2部 映画上映 (15:00〜16:30)
「ハロー ヘミングウェイ」
(キューバ／1990年／カラー／90分)

大竹洋子

2000 7月9日 日

開場13：30　開演14：00

黒部市国際文化センター **コラーレ (カーターホール)**　入場料／全席指定　1,500円

主催 財団法人黒部市国際文化センター　共催 北日本放送　後援 黒部市・黒部市教育委員会

◇ 5歳未満のお子さまの入場はご遠慮願います。一時保育を希望される方は事前にご連絡ください。

■お問い合せ
財団法人 **黒部市国際文化センター**
TEL(0765)57-1201　FAX(0765)57-1207

■プレイガイド

黒部	コラーレ	(0765)57-1201
	メルシー	(0765)54-2221
	ロイヤルバリー黒部	(0765)54-1000
魚津	新川文化ホール	(0765)23-1123
	魚津サンプラザ	(0765)24-3030
入善	コスモホール	(0765)72-1105
	コスモ21	(0765)74-9100
宇奈月	宇奈月国際会館	(0765)62-2000
朝日	アスカ	(0765)82-2000
富山	インフォマート	
	[市民プラザ]	(076)491-0110
	[CiC駅前店]	(076)444-7013
高岡	高岡大和	(0766)27-1774

第12回新ラテンアメリカ(ハバナ)映画祭グランプリ受賞作品

HELLO HEMINGWAY

ハロー　ヘミングウェイ

スタッフ
監督：フェルナンド・ペレス　脚本：マイダ・ロイェロ　撮影：フリオ・ヴァルデス
編集：ホルヘ・アベリョ　音楽：エディシオ・アレハンドロ

キャスト
ラリータ：ラウラ・デ・ラ・ウス　ヴィクトール：ラウル・パス
ホセファ：エルミニア・サンチェス　トマス老人：ホセ・アントニオ・ロドリゲス

キューバ／ICAIC＝パイオニア映画シネマデスク／1990年／カラー／90分

解説

アメリカの文豪アーネスト・ヘミングウェイは、のべ21年間をキューバで過ごした。当時のキューバはアメリカの半植民地的存在であり、キューバ人の誰もが、傀儡政権であるバチスター派の崩壊を望んでいた。だがその一方で、若者たちは北米文化に憧れ、エルヴィス・プレスリーやジェームス・ディーンに夢中だった。

そんな時代のハバナを背景に、一人の少女の魂の成長を、「老人と海」にこめられたエスプリに託して、さわやかに繊細に描き、第12回新ラテンアメリカ映画祭のコラール賞(グランプリ)作品であり、キューバ人が愛してやまない映画である。

監督のフェルナンド・ペレスは1944年生まれ。ハバナ大学で文学を学んだのち、ICAICの傘下に入った。トマス・グティエレス・アレアなど先輩たちの助監督を経た1987年、長編劇映画「Clanadestinos」でデビュー、本作は第2作目にあたる。

脚本のマイダ・ロイェロはペレス監督の妻である。彼女は映画のヒロインと同様、ヘミングウェイに魅せられていた。ヘミングウェイがキューバに滞在していた頃の、子ども時代の懐かしい思い出、そして革命前夜の緊張したキューバへの愛とロマンが、ここにはあふれている。

物語

1956年、貧しい女学生のラリータが住むハバナの家の隣には、ヘミングウェイの大きな邸宅がある。ラリータは早朝に家をぬけ出し、ヘミングウェイ家のプールで、こっそり泳いだりもする。窓の内側の老人は、見て見ぬふりをしている。

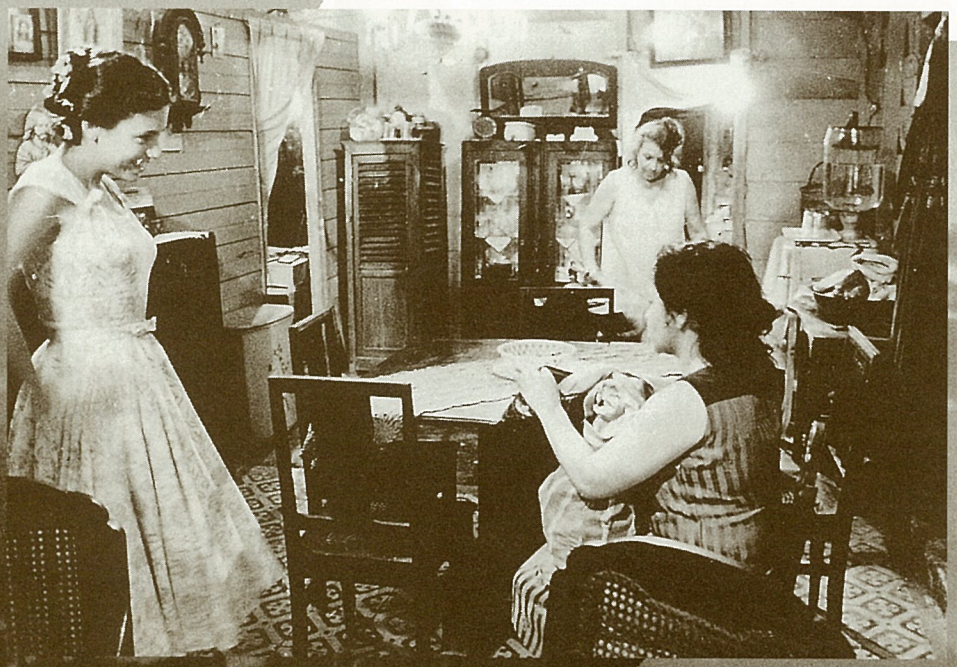
ラリータは「老人と海」の物語が持つ力強さにひかれていた。サンチャゴの漁師の毅然とした態度に、自分を反映させることもある。よりよい未来を求めて、ラリータはアメリカ留学の奨学金を申請することにした。しかし、家族も、愛国者の恋人も彼女の計画には反対だった。そのうえ、留学にはアメリカ国籍を持つ有力な保証人が必要だという。あの有名な隣人に頼んでみよう、ラリータはそう決心した。ヘミングウェイはラリータを助けることができるのだろうか―。

映画「ハローヘミングウェイ」に寄せて

見終わってしばらくの間、私は席を立つことが出来なかった。

1961年(昭和36年)3月、私は芸大の声楽科を卒業して、当時はあまり知られていなかったジュリアード音楽院のマスターコースに留学し、メトロポリタンオペラに出演するのが夢であった。東京のアメリカ大使館に何度も何度も足を運んだ。それは書類との戦いだった。私のつたない希望を満たすため、粘りながらも保証人の事、留学の当座の資金(ドル)等のことで問題は山積みであった。

その頃日本は、一年前の安保騒動の後で世間一般は何か挫折感が漂っていた。それでも八月の終わり、私はニューヨークに向う事になった。映画では、少女ラリータがヘミングウェイの生まれたアメリカのスタンフォード大学で文学を学ぼうとする。迫るカストロ及びゲバラ率いる革命軍。貧しい家の様子と、上べだけを見る、留学を受け入れる側の事務所の冷たさを映画は映し出す。そんな時ハバナの街中の古本屋の主人が“老人と海”の一節を優しく読んで聞かせるシーンは感動的で私が一番好きなシーンである。それは小説“老人と海”が人生の師であることを教えている。革命のためラリータの留学の夢は消える。しかし映画は人生の一度や二度の失敗に臆することなくヘミングウェイの“老人と海”が描いた人生の洞察、そして人生の希望を映し出す。

四十年前、お互いに懸命に生きた青春を思い起こさせた素晴らしい映画であった。それは私にとって人生の遠い思い出である……。

オペラ歌手・日大芸術学部教授　丹羽勝海